

(10月 30日)「サムエル記下 6:20~23」

わたしはもっと卑しめられ、自分の目にも低い者となろう。しかし、お前の言うはしためたちからは、敬われるだろう。」

(サムエル記下 6 章 22 節)

・神の箱の前で全力で踊るダビデは、しかも裸だったようです。その姿は王のものではないと、ミカルはダビデに言います。ミカルはダビデの妻になっていました。しかしここでは妻という言葉は一切出て来ず、「サウルの娘」としか書かれません。

・彼女は王の妻として、不適格だったということでしょうか。彼女はその後ダビデとの間に子を持つことなく、死を迎えることになります。王女であった彼女は、プライドが高かったのかもしれませんが。

・ここでのダビデの言葉、「わたしはもっと卑しめられ、自分の目にも低い者となろう」に目を留めたいと思います。彼は高い場所にいる王を目指しました。民衆の下で支える、そのような指導者が理想なのかもしれません。

(10月 31日)「サムエル記下 7:1~7」

「わたしの僕ダビデのもとに行って告げよ。主はこう言われる。あなたがわたしのために住むべき家を建てようというのか。」

(サムエル記下 7 章 5 節)

・ダビデは無事に神の箱をダビデの町（エルサレム）に運び入れました。しかしその神の箱は、天幕の中に置かれたままでした。当時まだ「エルサレム神殿」は建てられていませんでした。

・そこでダビデ王は、預言者ナタンに神の箱を入れる家を建てたいと相談します。最初ナタンは、「心にあることは何でも実行なさるとよいでしょう」と肯定します。しかしこれは、人間ナタンの思いだったようです。

・神さまはその夜、ナタンに「神の箱の家など必要ない」と告げられます。これが神さまの思いです。ただ後に神殿が建てられることになりますので、「今はその時ではない」という意味でしょう。ちなみにここに出てくる預言者ナタンは、この先大切な役割を果たします。

2026 年 10 月

サムエル記 上／下 通 読

10 月



(10月 1日)「サムエル記上 26:21~25」

今日、わたしがあなたの命を大切にしたように、主もわたしの命を大切にされ、あらゆる苦難からわたしを救ってくださいますように。」

(サムエル記上 26 章 24 節)

・サウルの「わたしが誤っていた」という言葉を、ダビデは信じる事ができたのでしょうか。24 章でもそうでしたが、これまでもサウルは何度もダビデと和解し、関係が修復されたように思えたからです。

・このとき「わが子ダビデよ、帰って来なさい」というサウルの呼びかけを聞いても、ダビデはサウルの元に行かずに従者を一人よこすように告げます。槍と水差しを返すためです。さすがに自らサウルの元には行きませんでした。

・ダビデは寛大な心で、サウルに語ります。ただ「主もわたしの命を大切にされ、あらゆる苦難からわたしを救ってくださいますように」という祈りは、サウルのためのものではなく、ダビデ自身のためのものです。これでサウルは、ダビデを追うのをあきらめたでしょうか。

(10月 2日)「サムエル記上 27 : 1~12」

ダビデとその兵は上って行っては、ゲシュル人、ゲゼル人、アマレク人を襲った。昔からこれらは、シュルからエジプトの地に至る地方の住民であった。

(サムエル記上 27 章 8 節)

・26 章でサウルを寛大に扱ったダビデですが、きっとまたサウルは自分を襲うに違いないと考えます。それはそうでしょう。何度も命を狙われてきたからです。落ち着いて眠ることもままなかったでしょう。

・ダビデが選んだ場所は、イスラエルの宿敵ともいえるペリシテの地でした。旧約聖書にはイスラエルとペリシテ人との戦いが何度も出てきます。いくらサウルでも、ペリシテに手を出すことは考えられませんでした。

・しかしダビデには、ガトの王アキシユの信頼を得る必要があります。ゲシュル人やゲゼル人、アマレク人を襲いながら、「ユダのネゲブを」などとウソを言います。イスラエルに反目している自分を演出しようとしたのでしょう。

(10月 3日)「サムエル記上 28 : 1~10」

サムエルが死んだ。全イスラエルは彼を悼み、彼の町ラマに葬った。サウルは、既に国内から口寄せや魔術師を追放していた。

(サムエル記上 28 章 3 節)

・まず 2 節までの記事を見ましょう。ここではペリシテ人のガトの王アキシユがダビデに対して、一緒に戦陣に加わろうという提案をしています。前回の箇所ではダビデは、ユダを襲っているように装っていました。しかしアキシユと一緒にくれば、ごまかしはききません。

・その結果の前に、聖書はサウルの物語に飛びます。サウルはペリシテ軍が攻める準備をしているのを見て恐れます。そこでサウルは、主に託宣を求めます。しかし夢によっても、ウリムによっても、預言者によっても主は答えることはありませんでした。

・すでに神さまは、サウルから離れてしまっていたのです。以前はサムエルが神さまの思いを語っていました。しかしその頼みのサムエルは、死んでしまったのです。そこでサウルは「口寄せ」を利用することになります。

(10月 28日)「サムエル記下 6 : 1~11」

彼らは神の箱を新しい車に載せ、丘の上のアビナダブの家から運び出した。アビナダブの子ウザとアフヨがその新しい車を御していた。

(サムエル記下 6 章 3 節)

・サムエル記上 6 章でペリシテ人から戻された神の箱は、長い間アビナダブの家にありました。ダビデがイスラエルの王になった今、その神の箱をダビデの町に移すことを決意します。しかしそこには大きな危険もありました。

・それは運ぶのに、とても注意が必要だということでした。民数記 4 章 15 節には宿営の移動の際、聖なるものに触れて死を招くことがあってはならないと書かれています。神の箱に触れることは、死を意味していたのです。

・アビナダブの子ウザは、牛がよろめいたときに神の箱に手を触れてしまいました。その結果神さまはウザを打たれ、ウザは死んでしまいます。ダビデは怒り、神の箱をダビデの町ではなくガト人オベド・エドム家に運びこみます。

(10月 29日)「サムエル記下 6 : 12~19」

ダビデとイスラエルの家はこぞって喜びの叫びをあげ、角笛を吹き鳴らして、主の箱を運び上げた。

(サムエル記下 6 章 15 節)

・3 カ月の間、神の箱はガト人オベド・エドム家にありました。すると主は、その家に祝福を与えます。それを知ったダビデは、やはりイスラエルに神の箱が必要だと確信したのでしょう。ダビデの家（エルサレム）に神の箱を再び移動しようとします。

・今回はかなり、慎重に行動します。主の箱を担ぐ者が 6 歩進むと、ダビデは肥えた雄牛をいけにえとしてささげます。さらにダビデは力のかぎり踊るのです。この光景はしかし、サウルの娘ミカルにはあまりよく映っていなかったようです。

・賛美のときに、大きく体を揺らして喜びを表現することがあります。しかしその様子を、冷めた目で見られることもあります。ダビデも必死で神さまに喜びを伝えようとしているだけに、少しかわいそうです。

(10月 26日)「サムエル記下 5 : 13~16」

ダビデはヘブロンから移った後、エルサレムでも妻をめとり、側女を置いたので、息子や娘が更に生まれた。

(サムエル記下 5 章 13 節)

・この時代、王や権力者、また財産を多く持つ人たちは複数の妻、そして側女を持つことが多くありました。わたしたちの社会では少し違和感がありますが、そうするには理由がありました。

・それは経済力がある人物がたくさんの子孫を残すことによって、民族の力を保つということです。また多くの女性を力のある人が養うことも、社会にとってプラスだと考えられていました。

・現在でもイスラム教では、一夫多妻制を認めているそうです。さてエルサレムで生まれたダビデの子どもの中に、ソロモンの名前があります。まだ彼は生まれていませんが、ヘブロンで生まれた子とあわせて 17 人もの息子がダビデにはいたことになります。

(10月 27日)「サムエル記下 5 : 17~25」

ダビデが主に託宣を求めると、次のように答えられた。「攻め上らず、背後に回れ。バルサムの茂みの反対側から敵に向かえ。

(サムエル記下 5 章 23 節)

・ダビデがイスラエルの王になって、ペリシテ人との戦いが起こります。イスラエルとペリシテ人は何度も戦ってきました。そしてサウル王とその息子ヨナタンは、ペリシテ人によって討ち取られました。(サムエル記上 31 章)

・ペリシテの人々は、新しくイスラエルの王になったダビデも討ち取りたいと思ったのでしょう。彼らはレファイムの谷に陣を広げます。それを迎え撃つダビデ。ただサウルのとくと違ったのは、ダビデが神さまに一回一回託宣を求めたことです。

・あるときは「攻め上れ」と命じ、またあるときは「攻め上らず、背後に回れ」と命じる神さまの言葉通り、ダビデは行動します。そして主の命じられた通りに、ついにペリシテ人を討ち滅ぼすことになったのです。

(10月 4日)「サムエル記上 28 : 11~19」

主は、わたしを通して告げられた事を実行される。あなたの手から王国を引き裂き、あなたの隣人、ダビデにお与えになる。

(サムエル記上 28 章 17 節)

・主が託宣に答えてくれないので、サウルは口寄せのできる女に会うことにします。夜に、それも変装をして会いに行ったのには理由があります。それはそのような行為を聖書は禁じていたからです。

・「口寄せや霊媒を訪れて、これを求めて淫行を行う者があれば、わたしはその者にわたしの顔を向け、彼を民の中から断つ。(レビ記 20 : 6)」その掟に従い、サウルは口寄せや魔術師を国内から追放していました。

・しかし背に腹は代えられないというのでしょうか、サウルは口寄せの女に頼み、サムエルを呼び起こさせます。女は見事にサムエルを呼び寄せますが、サムエルはサウルに「王国はダビデに与えられる」ことを告げるのです。

(10月 5日)「サムエル記上 28 : 20~25」

今度は、あなたがはしための声に聞き従ってください。ささやかな食事をあなたに差し上げますから、それを召し上がり、力をつけてお帰りください。」

(サムエル記上 28 章 22 節)

・昨日の箇所でサウルはサムエルから、「王国がダビデに与えられる」ことだけでなく、「主はイスラエルの軍隊を、ペリシテ人の手に渡される」ことまで伝えられました。自分の王位だけではなく、イスラエルの国までも危機に陥ってしまったのです。

・サウルはそのサムエルの言葉を聞いて、おびえてしまいます。そして地に倒れてしまいました。朝から何も食べていないこともその理由でした。そこで声を掛けたのは、先ほどサムエルを呼び寄せた口寄せの女性です。

・彼女はサウルに食事を差し出し、食べるように勧めます。それも「わたしはあなたの言葉に従った。だから今度はあなたがわたしの言葉に従え」と迫ります。王と分かった今、こんなところで倒れられたら迷惑なことこの上ない、ということでしょうか。

(10月 6日)「サムエル記上 29 : 1~11」

『サウルは千を討ち、ダビデは万を討った』と人々が歌い踊ったあのダビデではないか。」
(サムエル記上 29 章 5 節)

・28 章の最初に、こう書かれていました。「そのころ、ペリシテ人はイスラエルと戦うために軍を集結させた」。ペリシテ人アキシュと一緒にいたダビデは、自分も一緒に戦うと言っていました。そうするとダビデは、同胞を裏切ることになります。

・しかしダビデは、ペリシテ軍を離れることになります。それはペリシテの武将たちがアキシュに対して、不満をぶつけたからです。ダビデはただのヘブライ人ではありませんでした。サウルの後継者として名を轟かせていた人物だったのです。

・そこでアキシュは、ダビデに去るように説得します。ダビデは「王の敵であるイスラエルと戦う」思いをアキシュに伝えますが、その本心は分かりません。同胞と戦わずに済んだことを、内心喜んでいたのかもしれないのです。

(10月 7日)「サムエル記上 30 : 1~10」

兵士は皆、息子、娘のことで悩み、ダビデを石で打ち殺そうと言い出したので、ダビデは苦しんだ。だが、ダビデはその神、主によって力を奮い起こした。
(サムエル記上 30 章 6 節)

・ダビデと兵士たちは、アキシュに与えられていたツィクラグに戻ります。アキシュと共に戦おうとしていた彼らは、すべての兵士を連れて行ったのでしょう。その結果、ツィクラグの防御が手薄になってしまいました。

・その機に乗じて、アマレク人がその地を襲います。アマレク人もペリシテ人同様、イスラエルの敵として聖書には何度も出てきます。彼らは兵士のいない町を襲い、焼き払い、女性や子どもたちを連れ去ってしまいます。

・兵士たちはこの責任を、ダビデに負わせようとします。町の守りをおざなりにして、出陣したからです。しかしダビデはここで、主に託宣を求めます。どんな苦境の中でも、神さまの導きを求める。そのダビデの姿勢を聖書は描くのです。

(10月 24日)「サムエル記下 5 : 1~5」

イスラエルの長老たちは全員、ヘブロン王のもとに来た。ダビデ王はヘブロンで主の御前に彼らと契約を結んだ。長老たちはダビデに油を注ぎ、イスラエルの王とした。
(サムエル記下 5 章 3 節)

・ダビデはついに、イスラエルの王になりました。ただ考えてみると、サウル、ヨナタン、アブネル、イシュ・ボシェトといったダビデがイスラエルの王になるために障害となる人物は、みなダビデ以外の人物によって排除されていきました。

・ダビデは自分の手を汚すことなく、イスラエルの王位についたのです。そのことは、「神さまがダビデを王として選んだ」ことを示します。この箇所でも、イスラエルの全部属がダビデに対して願ったのです。

・ユダの王であったダビデは、あわせてイスラエルの王ともなりました。30 歳から 40 年間、その統治は続きました。しかし彼が王になっても、イスラエルには様々な問題が起こっていくのです。

(10月 25日)「サムエル記下 5 : 6~12」

ダビデはこの要害に住み、それをダビデの町と呼び、ミロから内部まで、周囲に城壁を築いた。
(サムエル記下 5 章 9 節)

・ダビデはエルサレムに行き、その地に住んでいたエブス人を攻めます。当時のエルサレムは古代都市で、そこにはまだ神殿はありませんでした。また「シオンの要害」という記述がありますが、シオンはエルサレムと同じ意味になります。

・エルサレム（シオン）は、ダビデの町となりました。彼は水くみのトンネルを通して町に入ります。水路として掘ったトンネルに忍び込んだのか、それはよくわかりませんが、エルサレムは高台にあったので水の確保は大変だったと思います。

・気になるのは、「目の見えない者、足の不自由な者」という記載です。彼らがダビデを特別に憎んだというわけではないものの、結果的に彼らを後に出来る神殿から追い出すこととなりました。とても厳しい差別的記載と言わざるを得ません。

(10月 22日)「サムエル記下 3 : 31~39」

すべての兵士、そして全イスラエルはこの日、ネルの子アブネルが殺されたのは王の意図によるものではなかったことを認めた。

(サムエル記下 3 章 37 節)

・ダビデの意図に反し、イスラエルの司令官アブネルは暗殺されました。このようなときに指導者は、報復が起きないように力を注がなければなりません。ダビデはアブネルを悼むことで悲しみを表現し、この暗殺が王の意図ではないことを示しました。

・裏切りや一方的な侵略が一般的だったこの時代、ダビデのアブネルに対する敬意は珍しい者でした。暴君ではなく人々を羊飼いとして導く姿がここに描かれているようです。ただ一つ、気がかりなことがあります。

・それはヨアブの気持ちです。ヨアブは弟のこともあったでしょうが、ダビデ王が欺かれられないようにという思いがありアブネルを殺害しました。しかしここではダビデと一緒に、アブネルを悼むように促されます。多分納得いかなかったことでしょう。

(10月 23日)「サムエル記下 4 : 1~12」

まして、自分の家の寢床で休んでいた正しい人を、神に逆らう者が殺したのだ。その流血の罪をお前たちの手に問わずにいられようか。お前たちを地上から除き去らずにいられようか。」

(サムエル記下 4 章 11 節)

・アブネルの死は、イスラエルの人たちをおびえさせます。というのもアブネルは司令官、つまり軍のトップであったからです。イスラエルの王はまだイシュ・ボシェトのままでしたが、彼も力を落とします。

・そんな中、略奪隊の長であるバアナとレカブが寝室で昼寝をしているイシュ・ボシェトを突き刺して殺してしまいます。彼らはイスラエル王の首を手土産に、ダビデ軍に徴用されようと思ったのでしょう。

・ところがダビデは、彼らを厳しく罰しました。サウル王が死んだときも、とどめを刺したアマレク人は処刑されました。今回は暗殺です。そのときよりも残酷な処刑方法が取られました。彼らはダビデの心を読み間違えたのです。

(10月 8日)「サムエル記上 30 : 11~20」

ダビデはアマレク人が奪って行ったものをすべて取り戻し、二人の妻も救い出した。

(サムエル記上 30 章 18 節)

・ダビデはツィクラグを襲ったアマレク人を、600 人の兵と共に追います。しかし疲れのために、ベソル川のところで 200 人の落伍者が出ました。追跡を続けたのは、ダビデと 400 人の兵ということになります。

・そこに一人のエジプト人がいました。彼はアマレク人の奴隷で、病のために主人に捨てられたそうです。ツィクラグに火をつけたのも自分たちだと、そのエジプト人の奴隷は素直に語りました。この時点でダビデに寝返る気満々だったようです。

・そのエジプト人の案内によって、ダビデと兵はアマレク人がいる場所につきます。アマレク人は多くの戦利品があったため、お祭り騒ぎをしていました。そのためダビデたちは、簡単に攻めることができたようです。奪われた人たちは、無事に帰ってくることができました。

(10月 9日)「サムエル記上 30 : 21~30」

ダビデに従って行った者の中には、悪意を持つならず者がいて、言った。「彼らは我々と共に行かなかったのだ。我々が取り戻した戦利品を与える必要はない。ただ妻と子供を受け取り、連れて行くがよい。」

(サムエル記上 30 章 22 節)

・ダビデと 400 人の兵はアマレク人と戦い、無事妻や子ども、そして戦利品を携えてツィクラグに戻ってきました。途中のベソル川には、疲れて脱落した 200 人の兵たちが待っていたことでしょう。

・400 人の兵士の中には、「実際に戦ったのは我々だから、戦利品は我々だけで分けるべきだ」と言う人がいました。とても自然な考え方です。妻や子どもは返すわけですから、「悪意を持つならず者」とまで言われるのもどうかとは思います。

・この箇所を読むと、「ぶどう園の労働者 (マタイ 20 : 1~16)」を思い出します。「これだけの働きに対してそれなりの見返りがあって当然だ」と考えた労働者と、「戦利品を与える必要はない」というならず者。わたしたちはどう考えるべきでしょうか。

(10月 10日)「サムエル記上 31 : 1~7」

従卒はサウルが死んだのを見ると、自分も剣の上に倒れ伏してサウルと共に死んだ。
(サムエル記上 31 章 5 節)

・28 章 19 節にこう書かれていました。「主はあなたのみならず、イスラエルをもペリシテ人の手に渡される。明日、あなたとあなたの子らはわたしと共にいる。主はイスラエルの軍隊を、ペリシテ人の手に渡される」。

・サムエル記上の最後の章で、この言葉が実現します。ペリシテ軍はイスラエルと戦い、サウルの三人の息子を討ち取ります。とてもあっさりと書かれていますが、その息子の中にはダビデと契約を結んでいたヨナタンもいました。

・サウルは直接ペリシテ軍に討ち取られませんでした。深手を負い、自らその命を絶つ選択をします。ペリシテ人のような「無割礼の者ども」には殺されたくないというのです。従卒はサウルを殺すことをためらいますが、サウルは剣の上に倒れ伏し、命を絶ちました。

(10月 11日)「サムエル記上 31 : 8~13」

翌日、戦死者からはぎ取ろうとやって来たペリシテ軍は、サウルとその三人の息子がギルボア山上に倒れているのを見つけた。

(サムエル記上 31 章 8 節)

・イスラエルの一つの時代が終わりました。イスラエルの初代国王であったサウルが死んだのです。イスラエルの人たちは王とその息子たちが死んだのを知って、町を捨てて逃げ去ってしまいます。

・サウルが自害したために、最初ペリシテ軍はサウルが死んだことに気づいていなかったのかもしれませんが。当時戦死者から武具などをはぎ取る行為は、当たり前のようにおこなわれていたことでしょう。

・サウルたちの武具が特別だったのか、サウルの背が高かったために気づいたのか、サウルと息子たちの遺体は運ばれ、城壁にさらされます。ヤベシュの住人がその遺体を持ち帰るまで、その仕打ちは続きました。サウルの死をもって、サムエル記上は幕を閉じます。

(10月 20日)「サムエル記下 3 : 14~21」

イシュ・ボシェトは人をやって、ミカルをその夫、ライシュの子パルティエルから取り上げた。
(サムエル記下 3 章 15 節)

・アブネルの使者の言葉を聞いたダビデは、イスラエルの本気度を試します。サムエル記上 18 章 20~30 節でダビデは、サウル王の二番目の娘ミカルを妻としました。しかしミカルはダビデの逃亡に手を貸した後、他の男性の妻になっていました。

・いわば「王家の娘」を妻とすることで、ダビデはイスラエルの正当な跡継ぎともなります。このことはイシュ・ボシェトにとって脅威だったことでしょう。しかしアブネルもイシュ・ボシェトも、その申し出通りにミカルをダビデに渡します。

・そしてアブネルは 20 人の部下を連れ、ダビデの元へ行きます。迎えるダビデは酒宴を催し、すべてが平和の内におこなわれていきます。昨日の敵は今日の友、とでも言うのでしょうか。しかしそこで終わらないのが、聖書の物語なのです。

(10月 21日)「サムエル記下 3 : 22~30」

ヨアブは王のもとに行き、こう言った。「どうなさったのです。アブネルがあなたのもとにやって来たのに、なぜ送り出し、去らせてしまわれたのですか。」

(サムエル記下 3 章 24 節)

・ユダの王ダビデとイスラエルの司令官アブネルは、契約を結ぶ方向で平和の内に別れました。そこへダビデの家臣ヨアブが帰ってきます。ヨアブは 2 章 15 節からの戦いで、ダビデの家臣を率いていた人物です。

・ヨアブはその戦いで、弟アサエルをアブネルに殺されました。ヨアブは二つの理由でアブネルを受け入れることができませんでした。一つは弟アサエルの仇として、そしてもう一つは軍の司令官としての自分の立場を守るためです。

・ヨアブはダビデに伝えることなく、アブネルをヘブロンに呼び戻します。そしてアブネルを暗殺するのです。ダビデは困ったことでしょう。イスラエルと友好的に契約しようとしていたからです。ダビデはこの暗殺は自分とは関係ないと強く表明します。

(10月18日)「サムエル記下3:1~5」

サウル王家とダビデ王家との戦いは長引いたが、ダビデはますます勢力を増し、サウルの家は次第に衰えていった。(サムエル記下3章1節)

・イスラエルの初代王サウルがどのように政治をおこなっていたかはわかりませんが、王の死後に権力争いがおこっているところを見ると、後継者育成はあまりしていなかったようです。強大な権力者にありがちなことです。

・ダビデ王家は力を増していき、イシュ・ボシェトが王となったサウル家は衰えていきます。しかし聖書は一気にダビデの元に王権が移ったとは書きません。王位は奪い取るものではなく、あくまでも神さまから与えられるものだからです。

・ヘブロンではダビデの息子が生まれます。アムノン、キリアブ、アブサロム、アドニア、シェファトヤ、イトレアムの6人です。ダビデの息子の中で一番有名なソロモンは、まだ登場しません。ただこの6人の間にも、後に問題が生じていきます。

(10月19日)「サムエル記下3:6~13」

わたしは王権をサウルの家から移し、ダビデの王座をダンからベエル・シェバに至るイスラエルとユダの上に打ち立てる。」(サムエル記下3章10節)

・物語は急展開を迎えます。そのきっかけは、イスラエルの司令官アブネルの行動でした。彼は亡きサウル王の側女と通じたのです。その行為は、自分が王権を実質的に握っていることを誇示することでした。

・イシュ・ボシェトはそのことを批判します。王である自分よりも上に立とうとするアブネルに対して、恐れを感じたのかもしれませんが。しかしそれに対しアブネルは、「ダビデの王座をイスラエルとユダの上に打ち立てる」と宣言したのです。

・この裏切りとも言える宣言に対し、イシュ・ボシェトは言葉を返すことさえできませんでした。そしてその宣言の通り、アブネルはダビデに使者を送ります。ダビデと契約を結ぶことで、自分の司令官としての地位を保とうと考えたのでしょう。

(10月12日)「サムエル記下1:1~10」

三日目に、サウルの陣営から一人の男がたどりついた。衣服は裂け、頭に土をかぶっていた。男はダビデの前に出ると、地にひれ伏して礼をした。

(サムエル記下1章2節)

・今日から、サムエル記下に入ります。上巻と下巻とは、サウル王の死によって分けられているように思います。サウルが死んだとき、ダビデはアマレク人を討ってツィクラグに帰りました。それから三日目に、一人の男が来ます。

・その男はサウル王の陣営にいたアマレク人でした。彼はサウル王とその息子ヨナタンが死んだことをダビデに告げます。さらに彼は、痙攣が起こったものの死にきれないサウル王に頼まれ、そのとどめを刺したと告げます。

・さらにそのアマレク人は、ダビデにサウル王の王冠と腕輪を渡します。死体から取ったのでしょう。彼は良かれと思って、「王であるしるし」をダビデの元に持って来たようです。しかしそれを受け取るダビデの心は、アマレク人の期待通りとはなりませんでした。

(10月13日)「サムエル記下1:11~16」

ダビデは彼に言った。「主が油を注がれた方を、恐れもせず手にかけて、殺害するとは何事か。」(サムエル記下1章14節)

・サウル王がダビデを憎み、殺そうと狙っていたことは、サウル王の陣営にいたこのアマレク人は知っていたのでしょう。だからサウル王が死んだという知らせをダビデは歓迎し、王の証しである王冠を喜んで受け取ると思ったのかもしれませんが。

・ところがダビデは、サウルとヨナタンの死を心から悼みました。自分の衣を引き裂き、共にいた者と共に夕暮れまで断食しました。ダビデにとって王位とは神さまから与えられるものであって、自分の力で手に入れるものではないのです。

・アマレク人はサウル王の死の知らせと王冠などを持って行くことで、褒美をもらうことを期待していました。しかし彼が与えられたものは死でした。主が油注いだ者に手を掛けることを、ダビデは強く非難したのです。

(10月14日)「サムエル記下1:17~27」

あなたを思ってわたしは悲しむ 兄弟ヨナタンよ、まことの喜び 女の愛に
まさる驚くべきあなたの愛を。

(サムエル記下1章26節)

・ダビデはサウル王とヨナタンを悼み、「弓」という歌を詠みます。そしてこの歌を、ユダの人々に教えるように伝えます。ダビデと弓というと、ヨナタンと別れるときの物語(サム上20:16~23)を思い出します。

・ダビデはサウル王を憎んでいなかったのでしょうか。何度も命を狙われ、国を追われたダビデですが、彼はサウル王のためにこの歌を詠みます。「初代イスラエルの王」としてのサウルに、敬意を表しているのです。

・そしてダビデは、愛する兄弟ヨナタンのためにも歌を詠みます。血縁関係はないものの、ヨナタンとダビデとはそれ以上の愛で結ばれていました。共に歩むことが許されなかった二人。ダビデの悲しみが伝わってくるようです。

(10月15日)「サムエル記下2:1~7」

ダビデは彼に従っていた兵をその家族と共に連れて上った。こうして彼らは
ヘブロンの町々に住んだ。

(サムエル記下2章3節)

・サウルが亡くなった今、サムエル記上16章ですでに油を注がれていたダビデが新しいイスラエル王になるかといえば、そうではありませんでした。なぜならその油注ぎは、サウルなどのいない場所でおこなわれていたからです。

・いわば、「ヤミの王」とでもいいましょうか。その状況の中、ダビデは神さまに託宣を求めます。ダビデは自分の今後は、神さまによって導かれるべきだと考えたからでしょう。神さまが示したのは、ユダの町ヘブロンでした。

・ユダの人々はダビデに油を注ぎ、「ユダの家の王」とします。日本の戦国時代でいえば、地方の藩主といった感じでしょうか。ここからユダの王となったダビデ王家の物語が始まっていくのです。

(10月16日)「サムエル記下2:8~14」

サウルの子イシュ・ボシェトは四十歳でイスラエルの王となり、二年間王位
にあった。だが、ユダの家はダビデに従った。

(サムエル記下2章10節)

・よくダビデのことを、「サウル王に次ぐ二代目のイスラエル王」ということがあります。しかし今日の聖書の箇所で見ると、二代目イスラエル王はサウルの子であるイシュ・ボシェトでした。

・ダビデはユダの人々(民衆)によって立てられた民主的な王でした。しかしイシュ・ボシェトは、司令官アブネルによって立てられた政治的な王と言えるでしょう。イスラエルの王の擁立に、ユダだけが従わなかったと言えます。

・この状況が数年続きますが、それはイスラエルにとってはあまり好ましくないものでした。そこでイスラエル側からは司令官アブネルらが、そしてユダ側からはダビデの家臣がギブオンで出会い、若者に勝負させることにします。とりあえずいきなりの戦争は避けました。

(10月17日)「サムエル記下2:15~32」

アブネルは重ねてアサエルに言った。「追うのはやめてくれ。お前を地に打ち
倒すわけにはいかない。お前の兄、ヨアブに顔向けできないではないか。」

(サムエル記下2章22節)

・イスラエル(ベニヤミン族とサウルの子イシュ・ボシェト側)とユダ(ダビデの家臣)の若者12人ずつが出ていき、戦います。しかしこの戦いは、死をもたらすものです。その12人だけで終わるはずもありませんでした。

・それは激しい戦いへと変わり、アブネルとイスラエルの兵はダビデの家臣に打ち負かされます。そこでイスラエルの司令官アブネルは、マナハイムへと敗走していきます。なおダビデの家臣の中にはツェルヤの子ヨアブ、アビシャイ、アサエルがいました。

・アサエルは足が速く、アブネルを追います。しかし兵士としての能力は高くなかったようです。アブネルは同胞だったヨアブの弟を殺すのをためらいますが、アサエルは最後まで諦めず、結局命を落としてしまいます。そのほかの戦いは、ユダ側の勝利で終わりました。